



祝うたア!!



博多どんたくの源流

博多松囃子 国重要無形民俗文化財指定

福岡を代表する祭り行事であり、博多どんたくのルーツである「博多松囃子」は2020年3月16日に国重要無形民俗文化財に指定されました。

そこで、今回あらためて「博多松囃子」と「どんたく」についてご紹介します。



どんたくのルーツ

「博多どんたく」は、わが国の古い民俗行事「博多松囃子」(国重要無形民俗文化財)を起源としています。また、「どんたく」の名称は、明治時代に一時禁止されていた「松囃子」を復活させる際に呼ばれ始めたもので、オランダ語の Zondag (休日) がその語源と言われています。

戦後の昭和21年5月、「松囃子」と「どんたく」が8年ぶりに復活しました。肩衣を紙で作し、馬はハリボテを首から胸に下げ、三味線、太鼓など戦災を免れたところから借り集めて、「博多どんたく」のおはやしを瓦礫の町に響かせながら練り歩いたことが、復興へ大きな勇気を与えたといわれています。



どんたくミニ知識

一束一本

いっすくいっぼん

松囃子の通りもん(行列)を迎える側はお祝儀の「1束1本」を用意します。

半紙1束と白扇1本のことで、三方に掛けて渡す。



粋な肩裏

いきなすらせ

博多どんたくの衣装、羽織をするりと裏返せば、これが古くから伝わるどんたく参加衣装。博多っ子の粋がのぞく。



シャモジの起こり

昔、商家の前をどんたく囃子が通りかかった時、そのオハヤシの見事な音色に夕食を支度中の商家のオカミさんが浮かれだし、手にもっていたシャモジを叩いてオハヤシに加わったことから始まる。



祝 博多松囃子 国指定重要無形民俗文化財



「博多松囃子」とは

松囃子とは松の内に行く囃子の意で、福を祝う芸事のひとつです。「博多松囃子」は、新しい年に祝福をもたらす歳神を迎える民俗行事が博多の町人によって風流な民俗文化となり定着したもので「流（ながれ）」と呼ばれる博多の自治組織によって現在まで受け継がれています。

その歴史は古く、博多がかつて平家の対宋貿易の基地であり、1179年（治承3年）に病没した平重盛に対する謝恩として始まったと言い伝えられており、今年で841年の歴史と伝統を有します。「三福神」（福神、恵比須、大黒天）と「稚児」で構成する「博多松囃子」は旧正月に催行していましたが、1949年（昭和24年）から制定された憲法記念日に合わせて5月3日、4日に催行されるようになりました。

後にゴールデンウィーク中に開催される「博多どんたく港まつり」の起源となった「博多松囃子」は2日間で150ヶ所以上もの商家や企業、官公庁など市内一円をお祝いして練り歩きます。



「三福神」（福神、恵比須、大黒天）と「稚児舞」について



写真左から 福神、夫婦恵比寿、大黒天



稚児舞

福神は福神流、夫婦恵比須は恵比須流、大黒天は大黒流が受け持ちます。福神、恵比須、大黒の三福神を中心とする行列は、それぞれ先頭より先達、流れの代表、祝言の詞章を唱える子供たち、傘鉾（めでたい字や絵をかいた6枚の揮毫を垂らした鉾）、御神馬に乗った三福神、白丁を着た御付き、各流の人々が続き、町内を祝い練り歩きます。

稚児舞は、烏帽子、直垂、太刀を挿した「囃子方」の少年たちが、稚児の「言い立て」をはやしながらか、天冠をつけた「舞姫」を乗せた曳き台を引きます。一団には、肩衣・裁着袴・白足袋に杉下駄・「兒」の字が書かれた黄色い頭巾の男たちが随行します。訪問した各所において、「舞姫」が「囃子方」の太鼓・笛、そして男たちの地謡に合わせて稚児舞を披露します。